

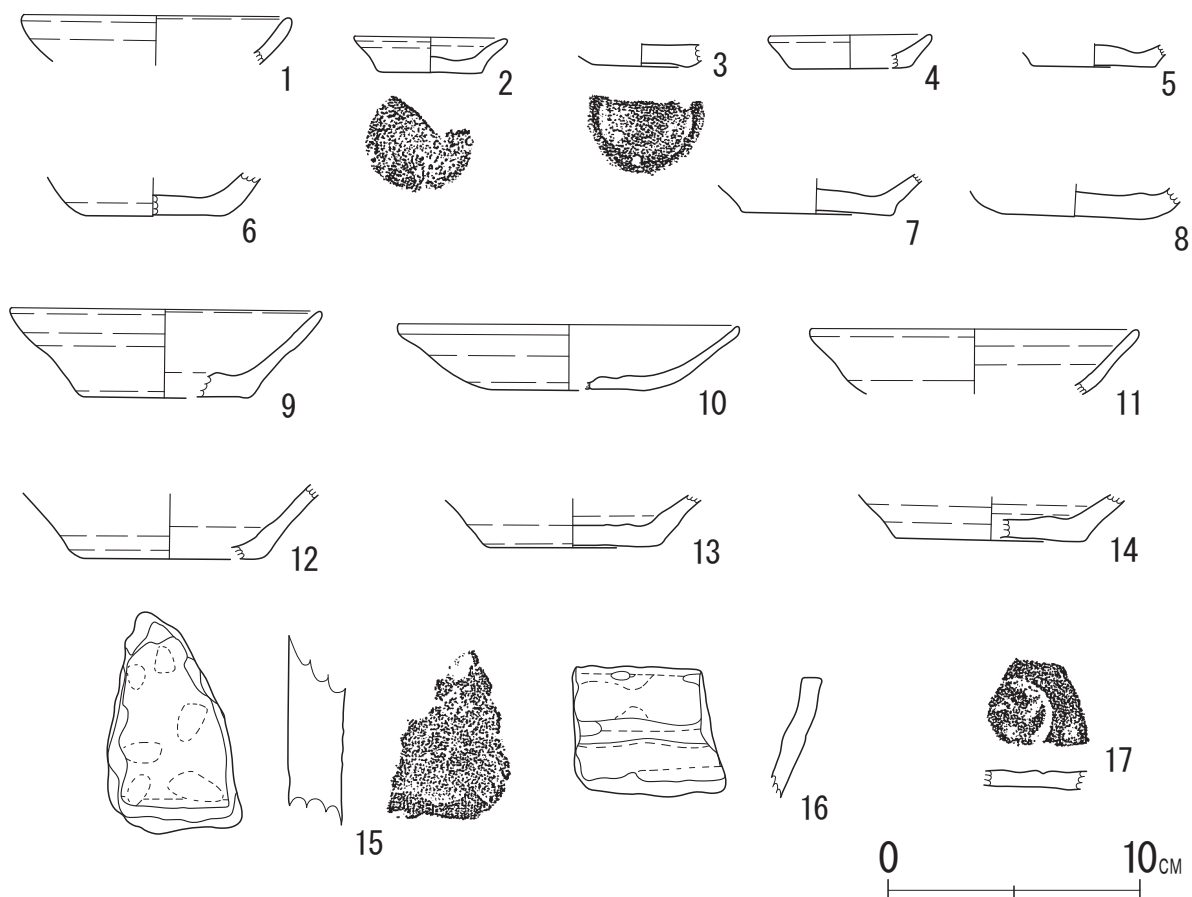


第 11 図 遺物分布図

甕の口縁部の破片である。5～6 a 期のもので本来N字状を呈する部分を欠失する。6は昭和初期に採集されたもので玉川小学校に保管されていた。所謂、比企型上向き剣頭文軒平瓦で東京都府中市の大國魂神社（六所宮）より同範資料が出土している（石川 1996）。

注

（注 1）郷土史研究の大先達であり県指定当時（昭和 11 年）地元玉川尋常小学校へ教頭として赴任しておられた小鷹健吾氏は『郷土玉川村史』の中で下里から嵐山溪谷までの槻川の蛇行により形成された小倉（玉川村）、遠山（嵐山町）、坂下（小川町）の閉ざされた集落とそこを縫う隘路について、小倉城に関わる集落として位置付け「天然の内曲輪」と解している。極めて先駆的な卓見であろう。その検証は今後の地域研究の中で明らかにしてゆかなければならない。



第 12 図 トレンチ出土遺物 1

(注 2) 『郷土玉川村史』

(注 3) 『日本城郭体系』第 5 巻 埼玉・東京

(注 4) 『梅花無尽蔵』

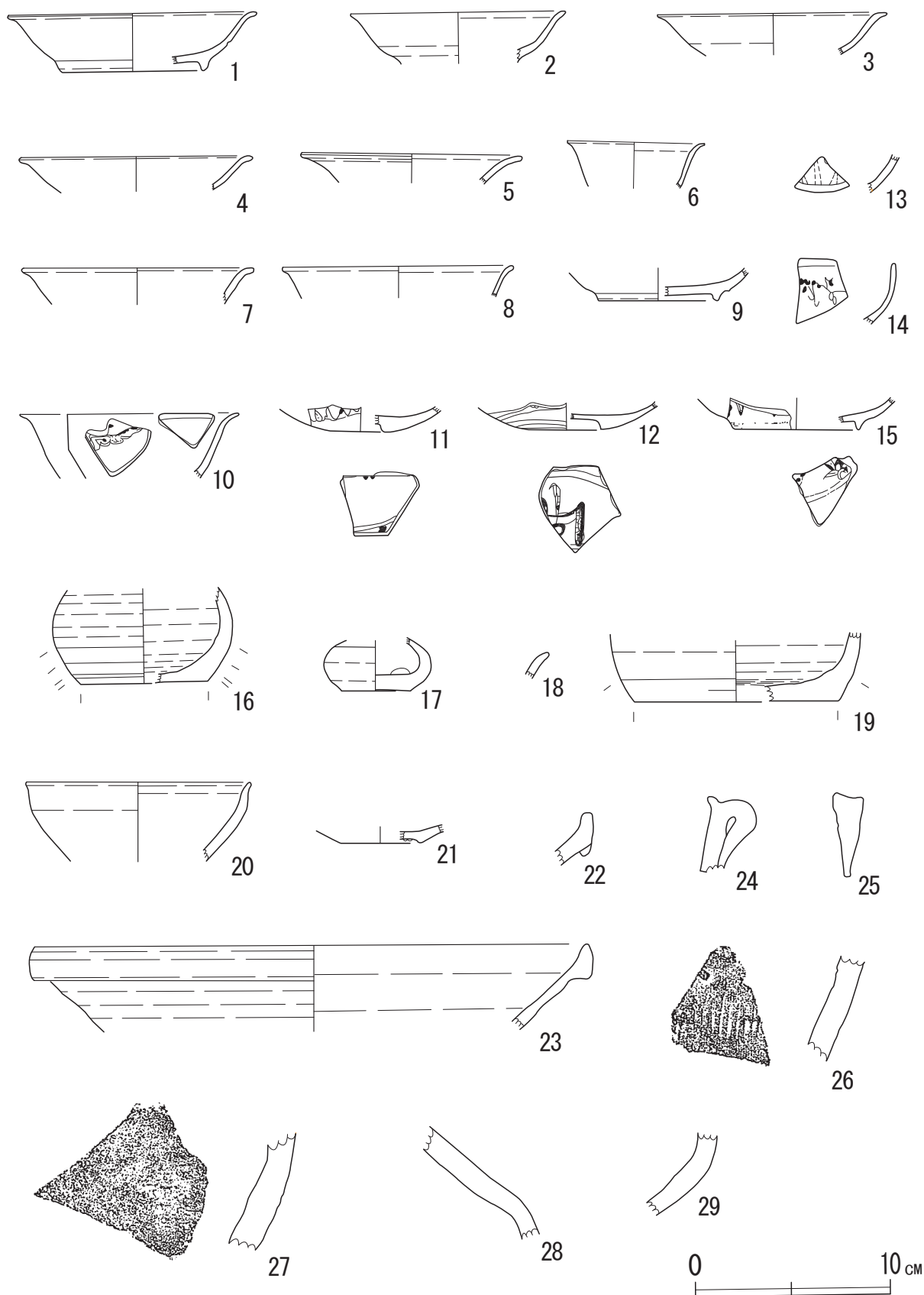
Ⅲ 遺構と遺物

1 遺構

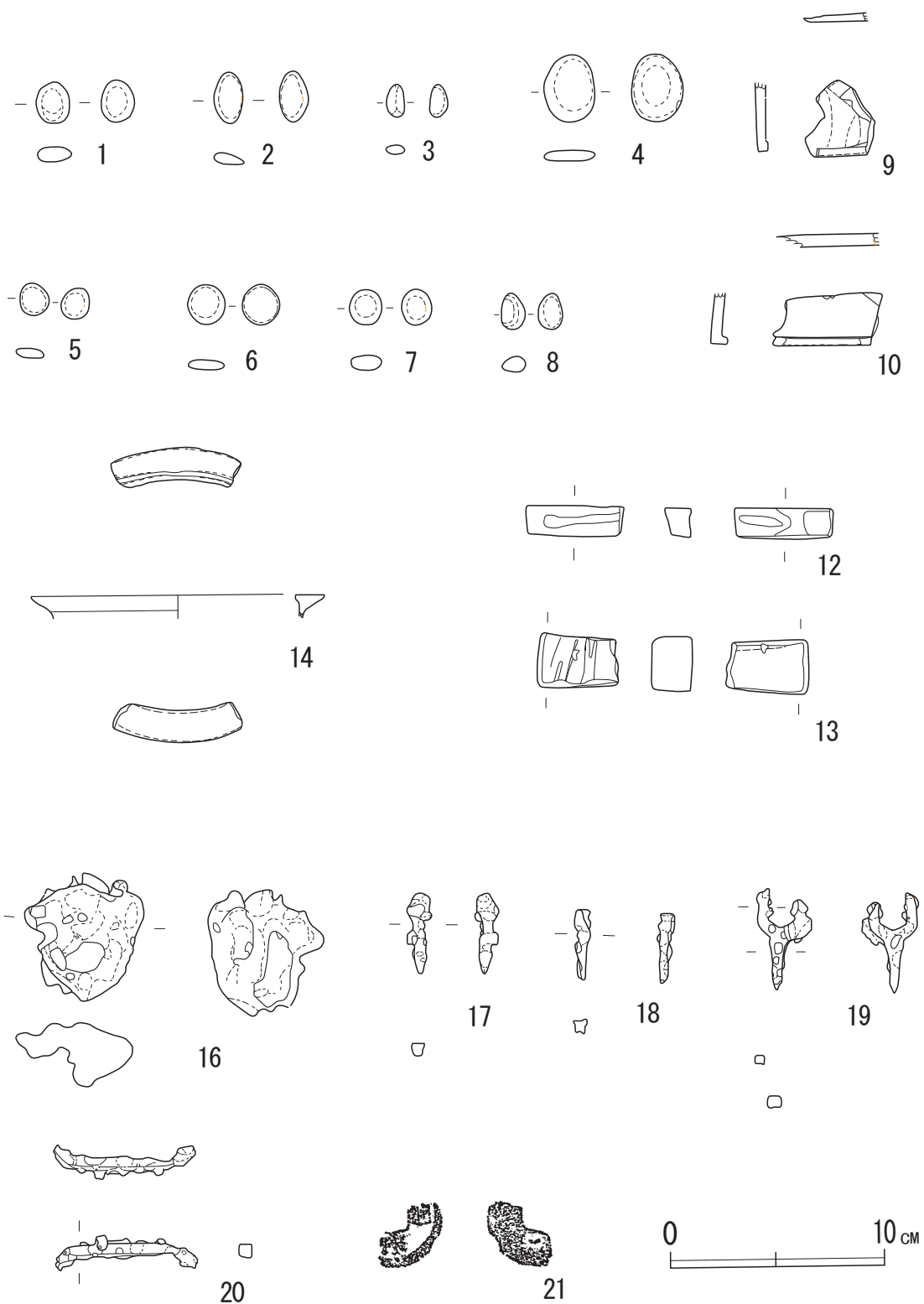
調査区は幅 3 m を基本に十字のトレンチを設定し必要に応じて拡幅している。(7 図)。ほぼ全域に渡り現地表 5 ～ 10 cm 下に結晶片岩系の岩盤が存在し、その部分では遺構確認は比較的容易であった。ただしトレンチの中央の交差部分と南端、西端では岩盤が潜り込み黄褐色系の土層の堆積が見られた。南端と西端部分はサブトレンチをもって深掘し中央の交差部分は 15 年度末精査となった。

(1) 建物跡

トレンチ調査により多くの柱穴が確認されており、15 年度現在大きく 3 グループに分けられる(8 図)。柱穴は、1 m 前後の大型のもの、50 cm 前後の中型のもの、10 ～ 20 cm の小型のものがあり、概して大振りのものが多い。トレンチ幅のため、各柱穴の組み合わせは判然としないが、第 1 建物跡と第 2 建物跡はほぼ確実に建物の軸は郭 1 内郭の土塁裾と同一軸で内郭部分の企画性の高さを伺わせる。柱間は 220 cm (7 尺前後) 前後のものと 200 ～ 190 cm (6 尺 5 寸前後) 程度のものがある。また 1 号建物跡は焼土ブロックや焼けた壁土が確認面で大量に出土し焼失又は片づけによる痕跡を残す。第 3 建物群では、切り合いが見られ、柱穴の時期や新旧を想定できる可能性がある。



第 13 図 トレンチ出土遺物 2



第 14 図 トレンチ出土遺物 3

（２）整地層

郭１トレンチ西隅で２期以上の造成痕がセクションより確認された。最下層からＣ群の白磁が出土しており、造成開始時期の一端を示している。

（３）通路跡

トレンチ南西端と南東端に通路跡と思われるものが確認されている。いずれも郭１の造成軸と一致し建物同様、企画性を伺わせる。通路１は南虎口から東虎口にかけての土塁裾（７図）に沿って走行すると考えられる。路面はロームを突き固めた硬化面で幅は約 220 ～ 230 cm 程である。通路２は北虎口へ向かう現状通路部の南側延長線上に当たり第１建物に接する。第１建物からは約 5 cm 程の段差をもって上位に岩盤が堀削され僅かな差であるが立地面を異にする。幅は岩盤堀削がさらに東南の土塁下へ続くため不明である。

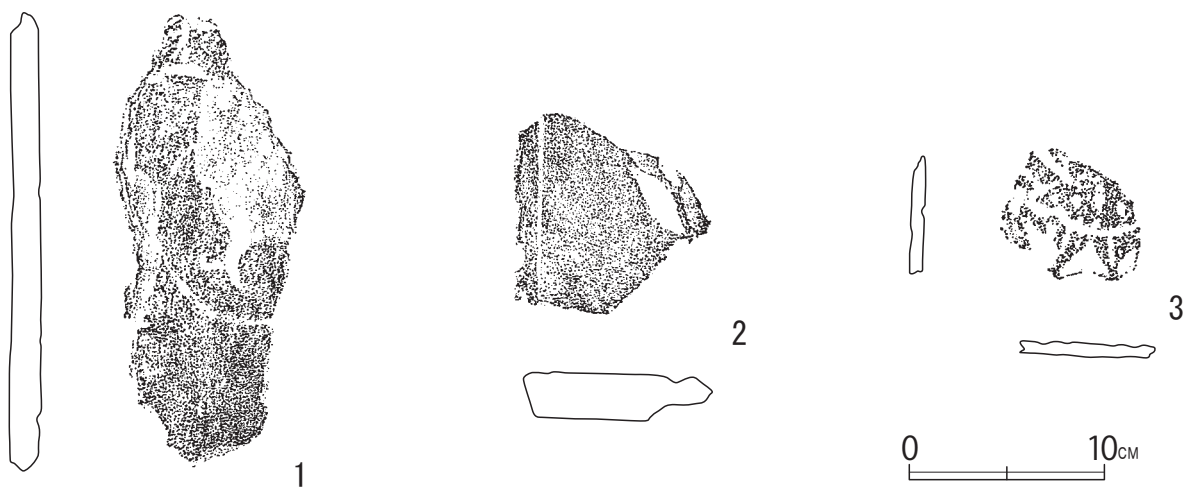
２ 遺 物

出土遺物には、カワラケ、在地土器、搬入陶磁器、基石、硯、板碑片、釘などの鉄製品、銭、碗型滓、壁土、加工石材などがある。総体としてまず 13、14 世紀段階があり、次に 15 世紀末～16 世紀後半の遺物群がある。また染め付け碗Ｂ群とＥ群に火災による被熱痕が見られ、常滑の大甕には破面に漆つぎのある資料が複数ある。

搬入陶磁器の内、瀬戸美濃製品では、中期ⅠかⅡの合子、大窯Ⅰ～Ⅲ期の天目茶碗、稜皿、搦鉢、徳利、小瓶があり、輸入磁器には白磁Ｃ群皿・碗・菊皿、染め付けＢ群碗、Ｃ群皿、Ｅ群碗がある。本郭出土のカワラケは 13 世紀の手づくねから存在し器形にもまとまりがない。器形的には本庄市東本庄遺跡（注１）や嵐山町菅谷館跡（水口・栗岡 2003）に類似するものもある。

第 12 図 1 ～ 14、17 はカワラケで、1 は手づくね 2 ～ 14 はロクロによる。10 は内底面に円状の沈線が見られ川越城跡など県内各所で出土する「の」の字状タイプ（注 2）の系譜を引くものと考えられるが川越城のものはやや深めで器形を異にする。より近いものは小川町中城跡（吉田 2001）で出土している。

17 は内底面に三巴文が押印されている。この資料のみ砂粒を多く含み特殊な胎土をもつ。15 は火鉢、16 は焙烙型の内耳土器である。第 13 図 1 ～ 9、13 は白磁で 1 ～ 5、7 ～ 9 はＣ群の碗皿類である。6 は小坏 13 はＤ群の菊皿の破片である。10 ～ 12、14、15 は染め付けで 10 はＢ群の碗、11、12 はＣ群皿、14、15 は同一個体でＥ群の碗である。16 ～ 23 は瀬戸・美濃製品で 17 が中期Ⅰ～Ⅱの合子



第 15 図 トレンチ出土遺物 4

用 途	産 地	種 類	破 片 数 (%)
食 膳 具	在地製品	土 器	2 6 6 (8 9 . 5)
	国産陶器	瀬戸・美濃	1 0 (3 . 4)
	中国製品	白 磁	1 4 (4 . 7)
		染 付	7 (2 . 4)
		小 計	2 1 (7 . 1)
	計		2 9 7 (8 2 . 7)
調 理 具	国産陶器	瀬戸・美濃	5 (1 0 0 . 0)
	計		5 (1 . 4)
貯 蔵 具	国産陶器	瀬戸・美濃	6 (1 1 . 8)
		常 滑	4 5 (8 8 . 2)
	計		5 1 (1 4 . 2)
煮 炊 具	在地製品	瓦 質	1 (0 . 3)
そ の 他	在地製品	瓦 質	4 (8 0 . 0)
	国産陶器	瀬戸・美濃	1 (1 . 4)
	計		5 (1 . 4)
総 計			3 5 9 (1 0 0 . 0)

(シンポジウム埼玉の戦国時代 検証 比企の城 掲載の小倉城跡に関する遺物組成表に誤りがあった。上記のとおり訂正する。)

第 1 表 平成 1 5 年度出土遺物組成表

でそれ以外は大窯期の資料となる。16 は大窯Ⅰ～Ⅱの小瓶、18、19 は大窯Ⅲの徳利、20 は同Ⅲの天目茶碗である。21 は鉄釉の稜皿、22、23 は大窯Ⅲ前半の播鉢の口縁部の破片である。26、27 は中世前半期の渥美か常滑産の大甕胴部破片で 13 世紀代の資料と思われる。24、25、28、29 は中世後半期の常滑大甕の資料で 24 は 9 ～ 10 期の口縁部、25 は 10 ～ 11 期の口縁部である。第 14 図 1 ～ 8 は基石、9、10 は同一個体の石製硯、12、13 は砥石で 12 は刃先の細いものを研ぐものか。16 は碗型滓、17、18 は鉄釘である。14 は銅鉦で火中したものか歪みがみられる。21 は銅銭で僅かに口宋通口と読める。第 15 図は板碑で 1 は最上端に連座の一部が見えその右下方に月輪と梵字の一部（サ 観音か）が確認できる。2 は連座の一部と枠線がみえ、側面の調整が未だ丁寧に行なわれており 14 世紀代の資料の可能性が高い。3 は蜂巣と連座が確認できる。

IV 小 結

現在までの調査は、遺構確認を中心に行っており、確認されている建物群など遺構の変遷については不明である。今後、代表的な幾つかの柱穴を発掘する中で検討していきたいが、郭 1 の造成軸と一致する建物跡や通路跡が確認でき郭 1 内郭部分の企画性の高さが伺われた。現状の遺物からは以下のとおり 3 段階の年代設定が可能である。

第1段階 13～14世紀 大福寺との関わり

手づくねカワラケ（12図1）、常滑（渥美）の大甕（13図26、27）、瀬戸合子（13図17）、板碑片（15図2）比企型検頭文軒平瓦（6図6）

第2段階 15末～16世紀前半 城の時代 1

染め付け碗B群（13図10）白磁碗皿C群（13図1～9）、染め付け皿C群（13図11、12）、常滑9～10期大甕（13図24）

第3段階 16世紀第2四半期～後半 城の時代 2

染め付け碗E群（13図14、15）、白磁D群菊皿（13図13）、在地内耳土器（12図16）、常滑11～12期大甕（13図25）、大窯Ⅲ期播鉢（13図22、23）、天目茶碗（13図20）、徳利（13図18、19）

この3段階の解釈として、まず第1段階は山麓に所在する大福寺と関わる場としての利用が考えられる。板碑の存在から供養の場などとして使用された可能性が高い。

続く第2段階は一定の空白の後15世紀末から設定される。この現象については、現在以下のように考えている。それは、小倉地内で確認されている板碑の造立が今のところ15世紀前半までであり同中葉以降確認できない点にある。板碑資料の取り扱いについては慎重を期す必要があるが板碑石材の産出地を間近に控える槻川・都幾川流域の比企西部地区では、通常旧村単位で16世紀代の板碑が所在するところであり15世紀末以降の板碑が確認できない点は大福寺または小倉集落にこの時期なんらかの変革があり遺物の空白が生まれたと考えている。ちなみに槻川の蛇行と山地により小倉、遠山、坂下の集落は流域に連なりながらも閉じた空間として存在し坂下、遠山とも16世紀半ばまで板碑の造立が確認されている。さらに補足として、トレンチ西北端で確認された整地層の最下層より白磁C群碗が出土しており、郭1の造成開始時期が15世紀末以降となる可能性も指摘できる。ただし白磁C群は年代幅の広い遺物であり、やはり慎重に扱う必要がある。いずれにしても、遺物の空白は場の利用の変化を示していると解せよう。よって第2段階は場の利用が変わり広義の寺院から城郭として改変取り立てられた段階と考えたい。今回の調査では、出土遺物から明らかにこの地方で後北条勢力が安定してくる永祿段階より以前の資料が出土している。従来縄張り研究から後北条段階の城として認識されてきたこの城にとっては思いもよらない成果であった。この地域では第2段階頃より両上杉氏の抗争から緊張関係が高まり山内上杉氏による平沢寺や菅谷に関する記事が複数確認できる。したがって小倉城がこの時期取り立てられる要素は充分ある（注3）。その場合、未だこの地域に後北条氏が進出しておらず、両上杉勢力による築城を視野に入れる必要があろう。山内上杉氏はどうか。嵐山町遠山の遠山寺は小倉城主ゆかりの寺とされ同寺に所在する位牌や過去帳は小倉城に遠山氏が在城した根拠とされるが、その開山漱恕全芳は山内上杉氏に連なる深谷上杉氏と関わり永正15年（1518）示寂している点注意が必要である。扇谷上杉氏はどうか。その場合は上田氏による取り立ても考慮する必要がある。それは、この城が上田氏の根拠地の一つである小川盆地の最東端にあり閉ざされた小川盆地より東へ押し出し松山城への連絡をとるには、まさに欠かすことのできない地点であるからに他ならない。小倉城から見て菅谷、平沢寺、遠山寺はいずれも槻川の対岸にあり上田氏の対山内上杉氏最前線に位置すると考えることもできる。またこの城からは南北方向の視界は悪いが東西方向へは十分な視界が確保されている。特に東方はきわめて良好に視界が広がり菅谷、大蔵、唐子、松山の町が見渡せその先には松山城が所在する。

第3段階は、まさに従来の後北条段階の城とする位置づけを迫認する形となるが大窯編年の大窯Ⅲ期の遺物が定量出土しているなか、確実にⅢ期後半とされるものが現在確認されておらず今ところ天正末年までの使用は考えづらい。しかし、注目されるのは大窯Ⅱ期で廃絶し戦国最末期に向

かって淘汰され拠点城郭へ収斂して行く城郭群の中でこの城が 16 世紀半ばから後半期まで使用された点である。そこに中規模でありながらもこの城の特徴を見いだすことができるのかもしれない。この問題は、大規模な石積みの使用や郭 1（主郭）内の企画性の高い造成と建物配置、城下集落の問題などと関わり重要な問題を孕んでいるが今回の報告からのみでは詳述することは出来ない。今後の課題としたい。

さて今回の調査で提示した第 3 段階の 16 世紀半ばから後半という年代観は、伝承どおり後北条氏の重臣遠山氏の利用が確認されたとするのも一つの解釈として成り立つ結果である。ただし後北条段階と言ってもそのまま遠山氏の利用が確認されたわけではあるまい。もちろん、それを否定するものでもないが今後文献資料の再精査や聞き取り調査、考古学調査など総合的に検討してゆく必要を感じる。いずれにしても小倉城に関する調査は始まったばかりである。

注

（注 1）『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証 比企の城』資料編参照

（注 2）埼玉県・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『川越城／古在家Ⅱ』

（注 3）利根川宇平 1991「中世の玉川村」『玉川村史』通史編

参考文献

小鷹健吾 『郷土玉川村史』

柳田敏司・段木一行 1979『日本城郭体系 5』埼玉・東京

玉川村 1991『玉川村史』通史編

松岡 進 2002『戦国期城館群の景観』校倉書房

西股総生 1999「後北条氏の築城技術における虎口形質の獲得過程」『織豊城郭』6号

史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会 2005『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証 比企の城』

齋藤慎一 2005「比企地域をめぐる街道の変遷」『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証 比企の城』

吉田義和 2001『町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』小川町教育委員会

水口由紀子・栗岡真理子 2003「菅谷館跡出土遺物の再検討」『研究紀要』第 25 号埼玉県立歴史資料館

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 ―東アジア的視点から― 資料集』

日本福祉大学知多半島総合研究所 1994『中世常滑焼をおって』資料集

梅沢太久夫 2003『城郭資料集成 中世北武蔵の城』

中世を歩く会 2002『在地土器検討会資料集―北武蔵のカワラケ―』